

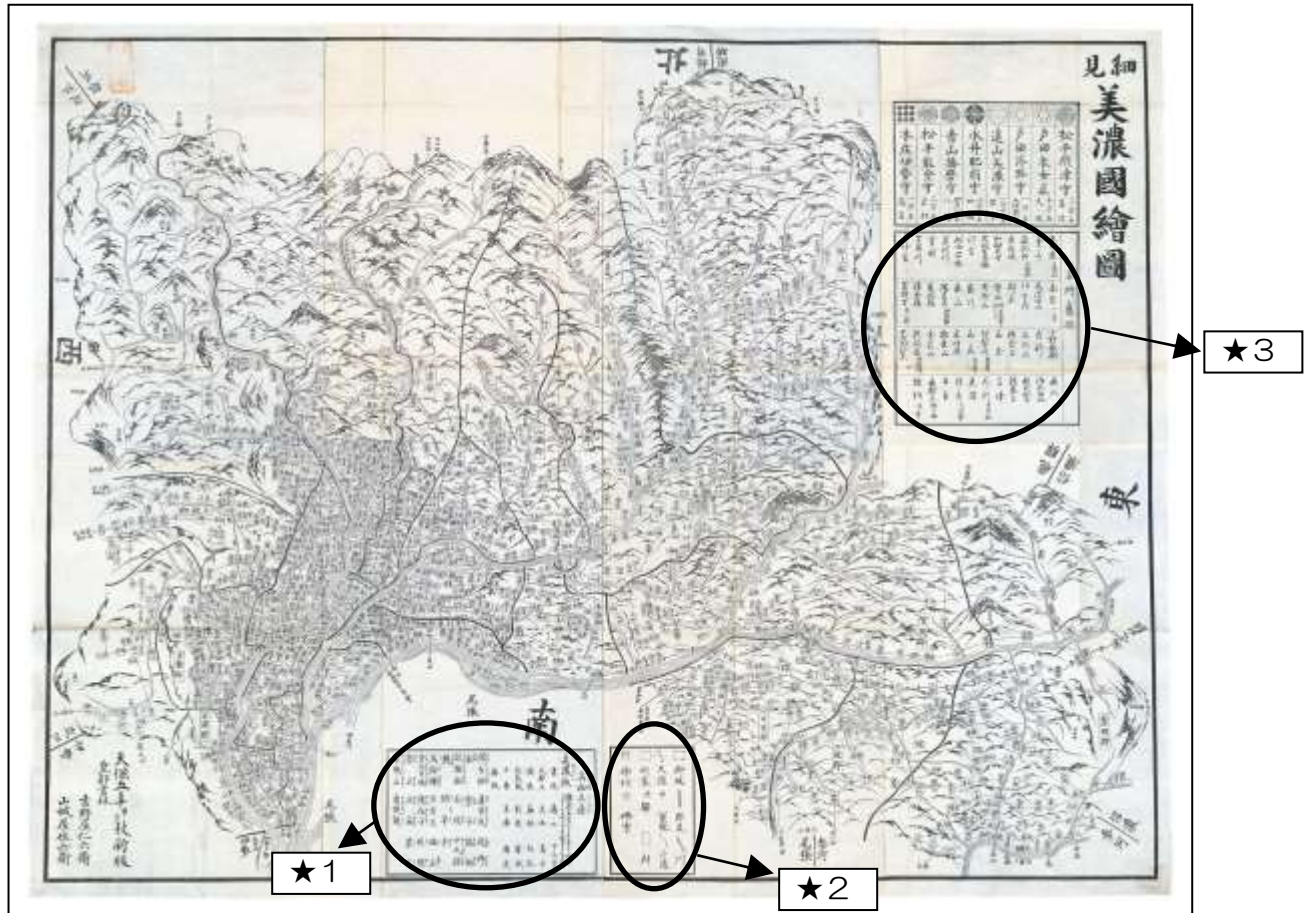
授業で使える当館所蔵地図

No. 65 『細見美濃國繪圖』

作成年：1834（天保5）年

サイズ：89×116cm

作者：吉野屋仁兵衛・山城屋佐兵衛（版）



【解説】

地図中の支配者とそれぞれの石高の一覧表など旧来の国絵図の性格は残しているが、名所旧跡一覧、名物土産一覧、寺社・神社・駅などの凡例から、旅を主目的とした国絵図と考えられる。ちなみに、土産のうち美濃紙は16種類が表示されている。木曾、長良、揖斐の三川が合流する美濃平野部では、村型がびっしりと記載され、この地域の開発の進展を想像させる。さらに、これらの三川の合流、分流の著しさは水害の多さも推測される。地図全体は木版黒刷りで派手さはないが、制作費を抑えて販売を増加させようとする意図もうかがえる。

★1 名物土産

美濃国で生産されていた特産品。美濃紙については、「種類甚多くして、尽く記しかたしといへとも、其あらましを記」とあり、代表的な16種類を紹介している。

「関ノ打物」は地名も明記しており、関の刃物が全国的に認知されていることを窺わせる。

また、「禹餘糧」は現在の土岐市・瑞浪市あたりで産出した粘土の一種、「月吉玉」は瑞浪市あたりで産出した化石（ピカリア）、「菅大臣嶋（縞）」は羽島市あたりで生産された織物、であると考えられる。

★2 凡例

現在の地図記号にあたる。美濃国の「御城」は加納・大垣・八幡・岩村・苗木の5つ。1615（慶長20）年の一国一城令において、大名は居城以外の城の破却を命じられた。美濃国は複数の大名が領地をあてがわれていたため、5つの城が残された。一方で、高須藩や高富藩などのように城持ちではない大名もいた。

「一里塚」は「大道」の一里（約4km）ごとに置かれた塚。江戸幕府が1604（慶長9）年から全国的な整備を始めた。道の両側に、5間（約9m）四方、高さ1丈（約1.7m）の盛り土を造り、樹木を植えた（通行人の休息や盛り土の流出防止のため）。宿場町までの距離を掴むことができる。

★3 名所旧跡

戸佐之宮 関藤川 鶯滝 黒地川 班女古跡 行宮 不破関屋跡 和射美野 車返坂 寝物語 菊水 養老	多芸郡 不破郡
笠縫里 鎌倉橋 藤釣橋 瑞岩寺 表山 藍川 御勝山 物見松といふ 幣松 関ヶ原 同 中道 美濃中山 南宮	安八郡 池田郡 一之宮
大矢田紅葉 頼政墓 金花山 稲葉山 不鳴池 西庄 伊都野川 居倉 横倉寺 谷汲山 森部 小野長橋	武儀郡 厚見郡 席田郡
鵜飼 長滝寺 日吉 月吉 虎溪 久々利 高澤 龍泰寺 新長谷寺 須原白山 表山	郡上郡 土岐郡 可児郡

美濃国の観光名所の一覧である。寺社仏閣や山岳河川が挙げられ、南宮大社や谷汲山、虎溪や鵜飼などといった、現在にも残る名所が見られる。また、車返坂や長範物見松のように、和歌に詠われたり伝承に基づいたりする場所も紹介している。一方で、稲葉山と金花（華）山が別とされているように、今日とは異なる捉え方も分かる。

一覧は郡ごとに分けられており、養老の滝などは地図中にも書かれ、観光地図として機能した。江戸時代における名所としては不破郡が最も多く、国分寺や不破関など古代からの長い歴史を感じさせる。

【利用の例】

○町と村の違いを知ることができる。

→現在の岐阜市役所周辺でいえば、「岐阜」「古屋敷」「川原」「忠節」「小熊」「御園」が町、「上加納」「今泉」「千手堂」などは村であり、町の規模を比較することができる。

○現在の地形や土地利用との違いを知ることができる。

→岐阜市島地区や各務原市川島地区は完全に中州になっていること、各務原市には野原（カカミノ）が広がっていることなど、現在の様子と比較することができる。

○集落・地形・道のつながりを知ることができる。

→現在の美濃市・郡上市付近は、集落の名前が河川に沿って書かれており、川が削ってできたわずかな平地に集落がつくられたことがわかる。山の名前や形状を描いており、移動をする際の目印にしていたことが分かる。

○江戸時代の人々の風習を知ることができる。

→「谷汲」の観音（谷汲山華厳寺）には「西国第三十三」と書かれていることから、寺を巡る慣習が一般的であったこと、池田郡の「飯盛山」には「此雲アレハ天気ヨシ」とあり、雲の運行で天気を予測していたことなど、当時の人々の興味・関心を窺うことができる。